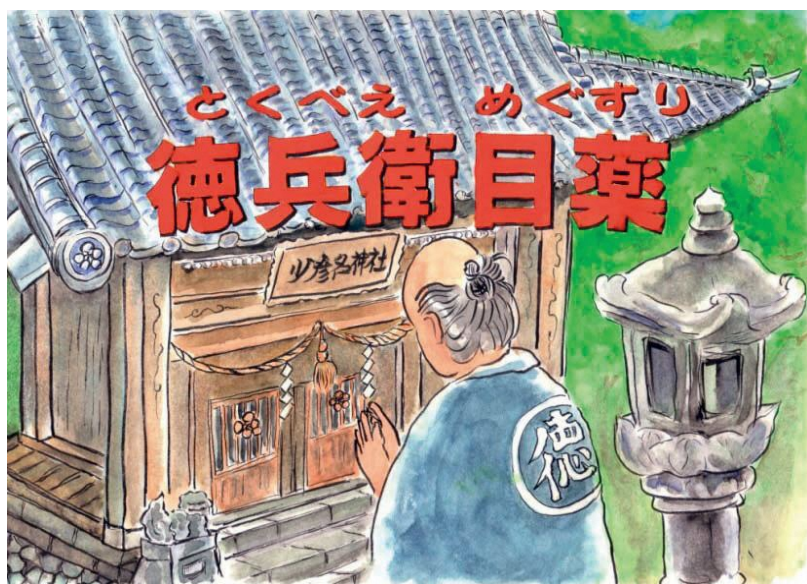
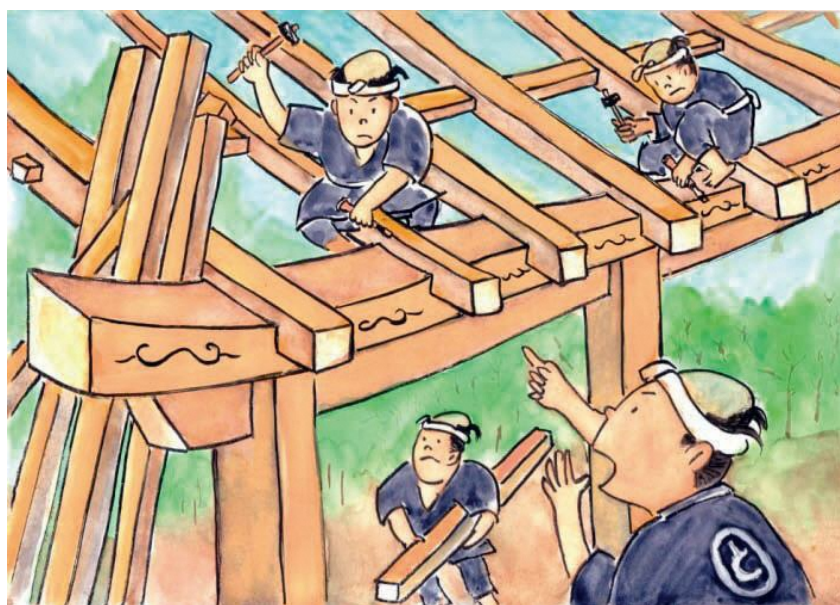




むかしむかし、栗生の村に徳兵衛という、
とても評判の良い大工の親方がいた。

村の神様に朝夕お参りして敬い、村の人た
ちには、だれにでも親切な人だった。

ある年、狭野神社の建て替えを頼まれたので、4、5人の大工を連れて出かけた。せつせと仕事をしたので、予定よりも少し早く屋根の棟上げむなあをすることになった。





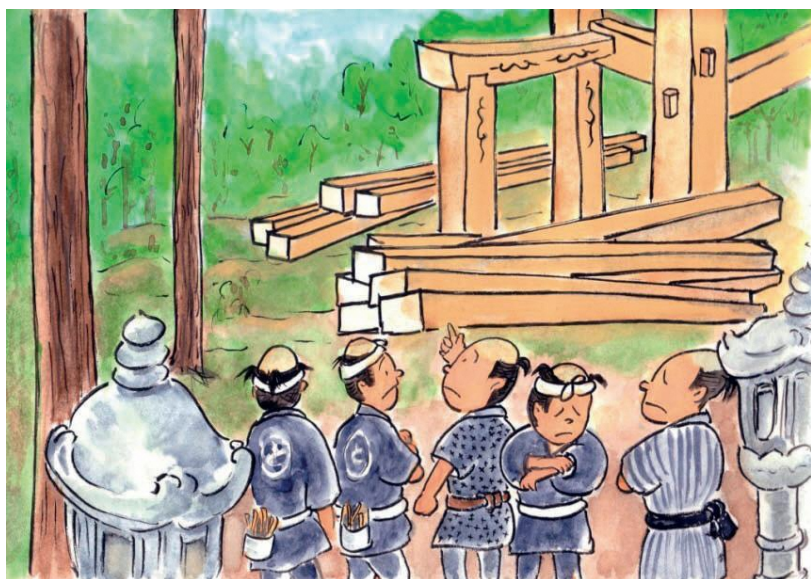
徳兵衛は、明日の建前^{たてまえ}が間違はなく成功する
ようにと、念には念をいれて、屋根の組み方を
調べていた。

その時、屋根の上で仕事をしていた大工の
一人が、しくじって金槌^{かなづち}を落としてしまった。
それがまた、運の悪いことに、徳兵衛の左目に
ガンとあたってしまった、徳兵衛はその場にひ
っくり返った。

目から血が噴き出^ふすし、頭ががんんと痛む
ので、とてもその場にいられず、目をおさえな
がら飛ぶように、我が家へ帰った。

昔はこんな田舎では眼医者なんていない。できることと言ったら、冷たい水で冷やし、手ぬぐいで、痛む眼を冷やすことしかできなかった。徳兵衛は家で休んでいたが、明日の建前をどうしたらよいかと考えると、気になって気になって、横になっても、なかなか休めなかった。





一方、狭野神社の方では、肝心^{かんじん}の大工の親方が目のケガをしてしまったので、みんなが集まって、今後のことを相談していた。

「面倒^{めんどう}なことになったなあ。」

「こりゃ、どうすっかいや。」

「もちろん、建前をのばさんなんやろ。」

「そうせんなんかなー。弱ったこっちや。」

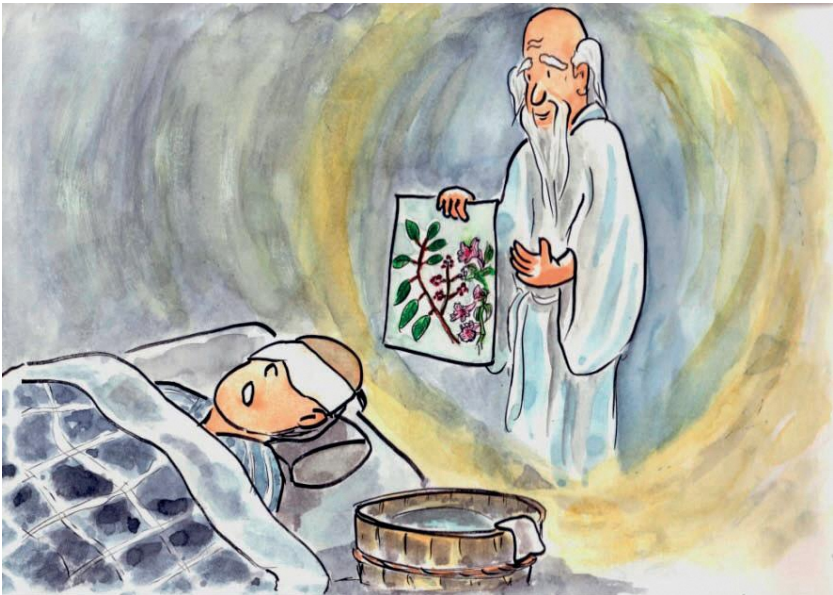
あれやこれやと話し合ったが、いい案^{あん}がでなかった。

夜になった。徳兵衛はやはり目が痛くて、なかなか寝られなかった。

そのうち、うとうととしてたら、白装束しろくまひこの見慣れない老人が枕もとにたっていた。

「徳兵衛よ、わしは少名彦神すくなひこ社の使いの者だ。

お前は、日頃神を敬い、人々に親切な心がけの良
い男だから、目の傷が治る薬の作り方を教えてつ
かわす。手取川の河原へいくと、これから言う草
があるはずじゃ。それをさがして、混ぜ合わせて
すりつぶすのじゃ。その汁で目薬を作り、目にさ
せば必ず治る。また、これから目の病で困ってい
る者があれば、この薬で助けよ。目薬になる草
は、これとそれとあれじゃ。」と言つと、それっ
きりすっと姿を消してしまった。





徳兵衛はびっくりして、寢床の上に起き直った。

「さては夢であったか。それにしても、日頃お参りしていた少名彦神社のお告げであったとは。本当にありがたく、もったいないことじや。」

そして、少名彦神社の方に向かって、両手を合わせた。

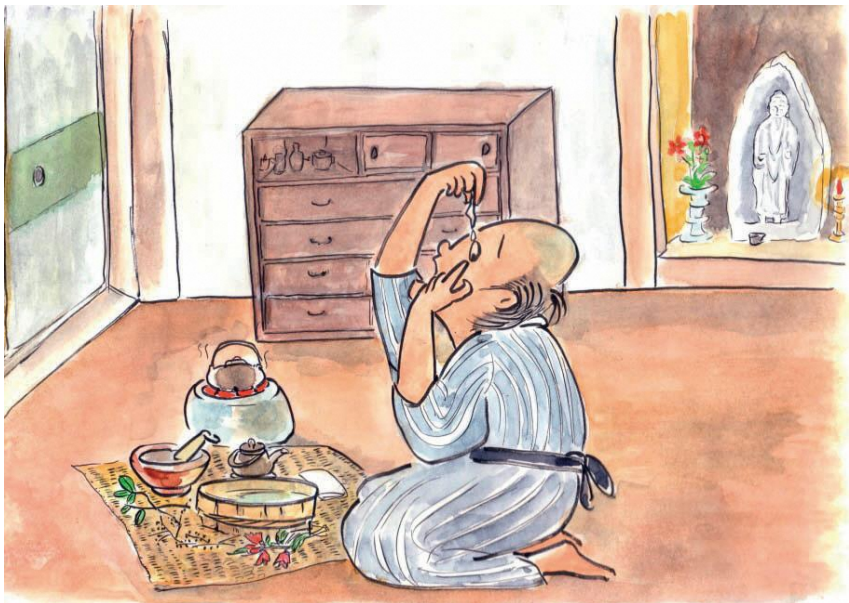
徳兵衛は、夜のあけるのも待ち遠しく、薄暗いうちに起きて、痛む目を押さえながら、河原へ行った。

そこで、神様のお告げの草をようやく探すと、それを家に持ち帰った。

神様のお告げの通りに、探してきた草をすりつぶして調合し、目薬を作った。そして、さっそくさしてみた。

すると不思議なことに、たちまち目の痛みがやわらいだ。そこで、少し間をおいて、二、三回続けてみたら、不思議にもあのひどい痛みが、けろりと治って、あたりがすっきりと見えるではないか。

喜んだ徳兵衛は、すぐさま少名彦神社にお参りし、頭を深々と下げ、心からお礼を申し上げた。





そして、その日のうちに、手下の大工を呼び寄せて狭野神社へ行き、日延^{ひの}べもせず、建前を無事に執^とり行^{おこな}ったので、佐野の人たちは大喜びだった。

さあ、このことはたちまちのうちに、近くの村から、加賀の国じゅうにも知れ渡った。

ときには、なんと遠い九州や江戸の人までもが、目をなおしてほしいと訪ねて来たそうだが、もちろん徳兵衛は、だれにでも親切に薬を分け与えて、目を治してやったのである。

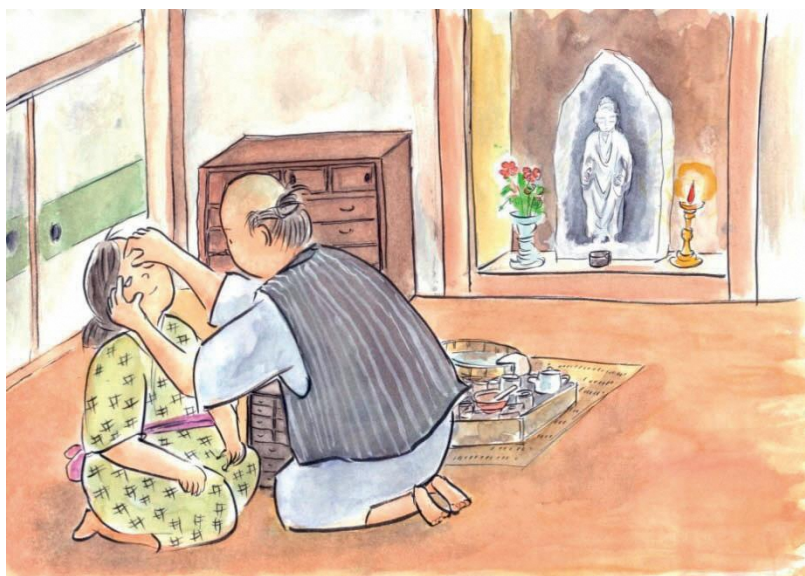
ところで、昔の百姓は、六月初め頃になる

と、稲の成長を助けるために、苗の周りの草取りや、苗の根が長く伸びるようにと『かくまわし』、『ねりつけ』の仕事をした。

その頃になると、稲の苗は三十センチ位になっていて、うつむいて仕事をする、伸びた鋭い葉の先で、チクリと目を刺されることが、たびたびあった。これはものすごく痛くて、とっても我慢できるものではなかった。

そんなとき、村の人たちは、田んぼからそのまま徳兵衛の家へ駆けつけたそうだ。





野良着姿の人にも、徳兵衛はやさしく、親切に目薬をさしてやった。すると葉先で刺され、血の出ていた目もさっと治ったので、みんなに大変喜ばれたそうだ。

この目薬は、少名彦の神のお告げで、教わった尊い作り方なので、徳兵衛はこの目薬の作り方を「代々一子相伝いっしゅうでん」として、この家を継ぐ者つぎにだけ教えることにした。

たとえば、家族の者であっても、主人以外は、作りの方をだれも知ることができなかったのである。

また、「この目薬は、神様から授かった薬だから、目が治ったからといって、商売にするな。目の病気で困っている人なら、誰でも助けるのだ」と言う徳兵衛から伝えられた決まりは、後々までも固く守られていたそうなの。

それでも、徳兵衛目薬で、苦しい目の病気が治った人が、喜びのあまりお礼と言って、お金を置いていく人が、たくさんいたそうなの。

そのお金は、そっくりそのまま神社に寄進し、神社の修繕や祭り事など、お金のかかるときに使われたという。





徳兵衛の家では、先祖代々家を継ぐ人は、ずっと「徳兵衛」の名を継いでいたが、現在では、もうその名を継いではいない。

訪ねて行くと、玄関には今でも

『家伝 徳兵衛目薬本舗』と書いてある古びた看板が掛けられている。そして、奥座敷には、少名彦の神の化身という、高さ三十センチほどの石に彫った「薬師如来」の仏像が大事に祀ってある。

徳兵衛目薬の家では、先祖代々これを敬い、大切にお守り続けていると言う。

栗生の人たちは、ご先祖の人達が助けてもらったと言うことで、「徳兵衛目薬」の話は今でも語り伝えるところに、村の神様である『少名彦神社』を、大切にお守りしていると言うことです。

絵・後 泰夫

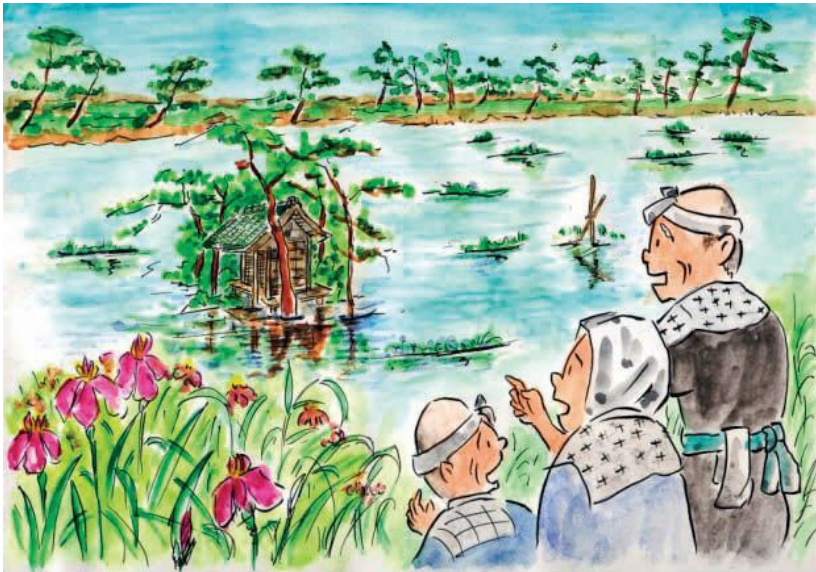


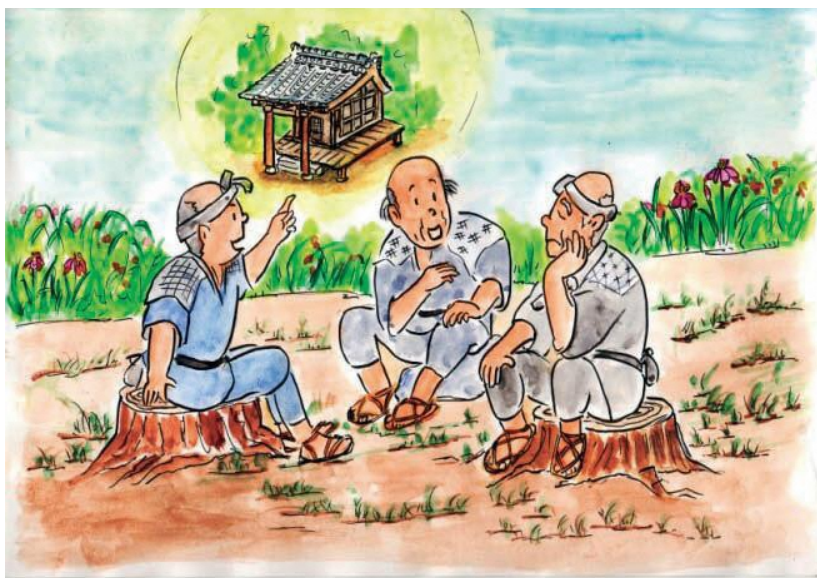
百年くらい前から福岡町に伝わる、
観音様のおはなしです。
尊い

それは今からちょうど百年前のことである。

福江村福岡（現在の能美市福岡町）の田んぼの中に「古宮さん^{ふるみや}」と呼ばれる古いお宮さんがあった。

いつも六月の大雨の頃になると雨のために田んぼが水びたしになり「古宮さん」だけがぽつんと水の中に残されていた。





このようすを見ていた村の人達は、
「古宮さんが水の中につかっているかわいそう
だ」

「早く何とかせんと、ばちがあたるぞ！」
といていた。

そこで、みんなが集まって相談して新しくお
宮さんを建てることになった。

「水のつかない場所が良いな」

「たいどんの畑はどうやろ」

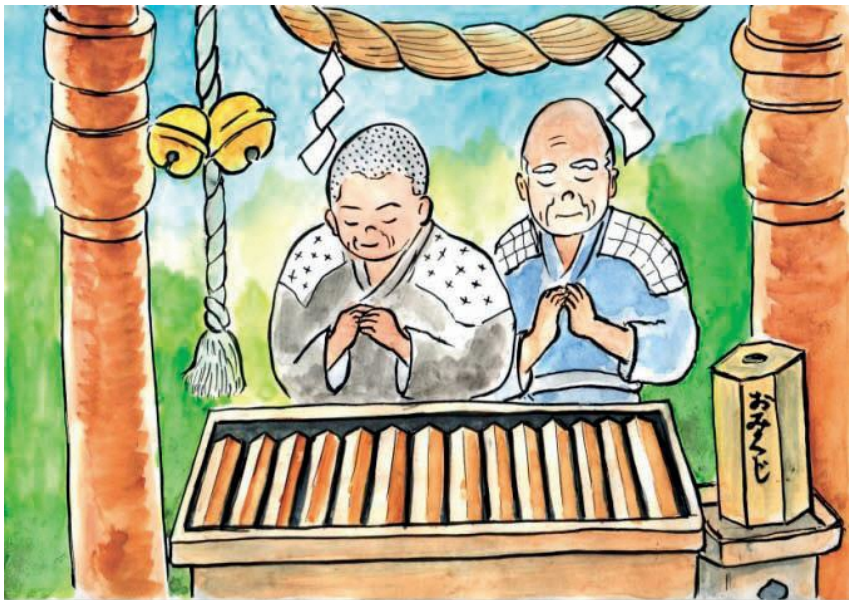
「うら、やいどんの田んぼがよいと思う」

いろいろな意見がでてなかなか話がまとま
らなかった。

そこで近くにある三か所の「おみくじ所」
に聞いてみるようになった。

ところがふしぎなことに、三か所のおみく
じ所とも「源助の田んぼ」がよいとお告げ
があった。

これには村の人たちもおどろき、きっと神
様が選んだ場所に違いない、そこで建てよう
と、みんなの話しがまとまった。





明治三十五年四月十八日のことである。

村人達が総出^{そうで}でお宮さんを建てるところの整地をしていると、「はんじよだの豊^{とよ}」の鍬^{くわ}の先に五十センチほどの木片のようなものが引っかった。

それを「源吉^{げんきち}のじいま」が掘り出して見ると仏像のような形をしていた。

「源吉のじいま」がそれを持って、「きよんさ」のこうど（川をせきとめた洗い場）で洗っているときのことである。

にわかに西の空から黒い雲が、もくもくと
わき上がり、しばらくの間にあたり一面が夜
のように暗くなった。

その時、突然つよい風が吹き荒れ、満開だ
った桜の花がみんな散ってしまった。

空には稲妻が^{いなずま}光り、雷が大地をゆるがすよ

うに鳴りだし大粒の雨が降ってきたので、村
の人たちは、あわてて木陰や家の中に逃げ込
んだ。





それでも、「源吉のじいま」はこうで木片
を洗い続けていると雨も止み、うららかな春の
日差しの中に、まばゆいばかりの光をはなちな
がら仏像となつて壮嚴な姿を現あらわされたのであ
る。

あまりのことに村の人達は驚き、これはきつ
と、あらたかな仏像に違いがないと思い、村の宝
物として保管することになった。

この様子を見て村の人たちは、この仏像は有名な方が作ったものに違いないと話し合っていました。

そこで、大仏師^{だいぶつし}に鑑定^{かんてい}してもらうことになり、鑑定の結果、仏像は今から千三百年前に白山を開山された高僧で、泰澄^{たいちよう}大師^{だいし}という方が作られた「聖観世音菩薩像^{せいこんぜおんぼさつ}」であることがわかりました。



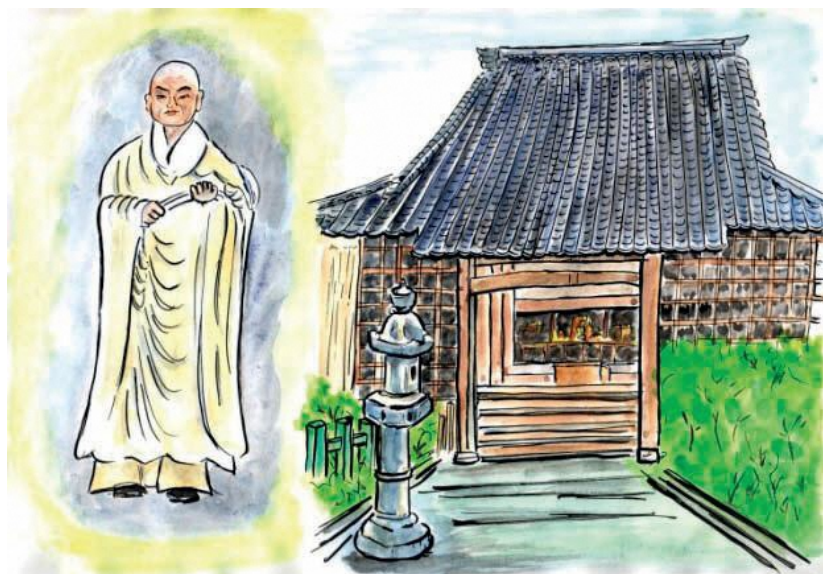


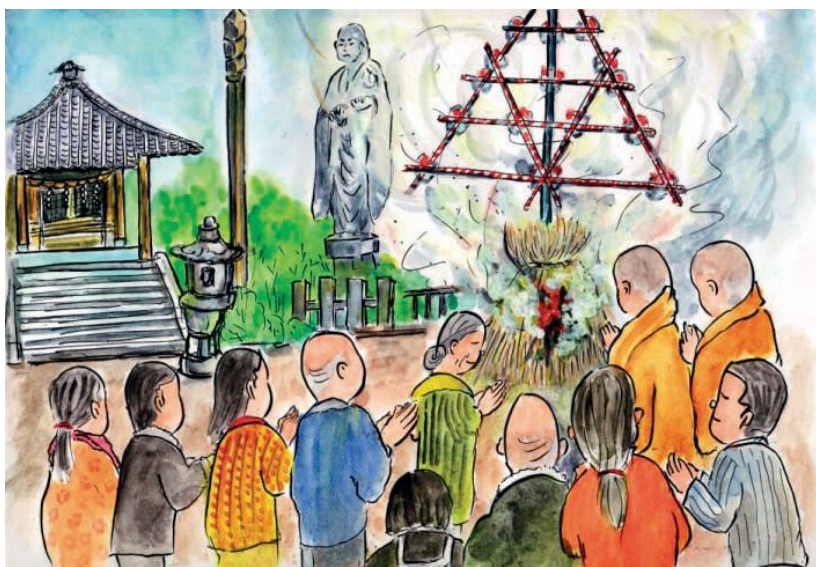
大仏師は、村の人達から仏像が社地の土の中から発掘された話を聞いて、この仏像は白山はくつ山麓さんろくの寺に安置あんちされていたのが手取川の洪水で流されてきて福岡村の地に辿たどり着かれたのであろう、福岡村を守って下さる仏像だから大事に護持ごじしてほしいと申されました。

村の人達は、仏像が発掘された場所に観音堂を建て仏像を安置しました。

それから数十年が経ち、村の人達が観音さまを作られた泰澄大師は、どこの人なのか調べてみることにしました。

そして 福井県麻生津^{あそうづ}の泰澄寺^{たいちようじ}でお生まれになられた方だと知り、はるばる泰澄寺まで訪ねて行きました。これがご縁で三十数年間泰澄寺との交流が続いており、毎年、四月十八日には泰澄大師奉賛会^{ほうさんかい}の方がお参りになられています。





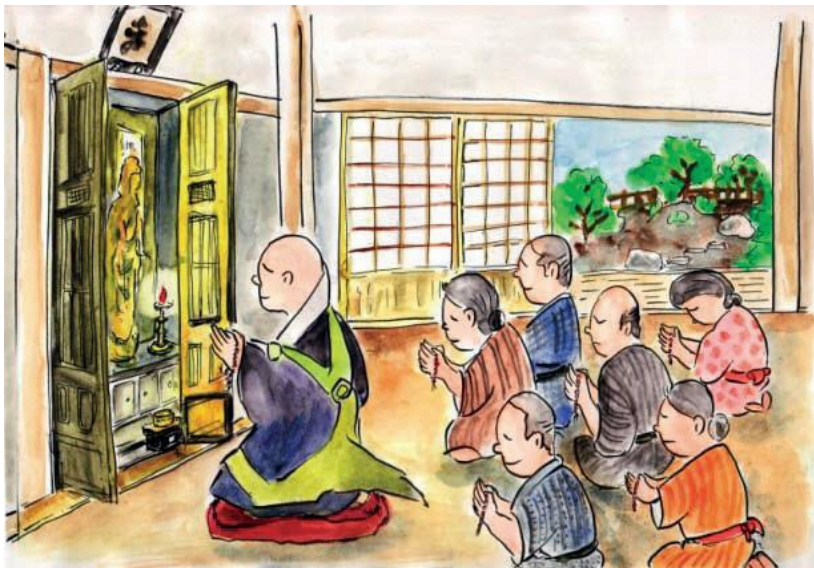
また、福岡町でも毎年、二月十一日のきとうさい祈禱祭
と七月十一日の泰澄大師たんじょうさい誕生祭に有志の方がお
参りされていますが、毎年二月に行なわれてい
る泰澄寺での万行会まんぎょうえや左義長さぎちやうはこの地方でしか
見ることの出来ないものです。

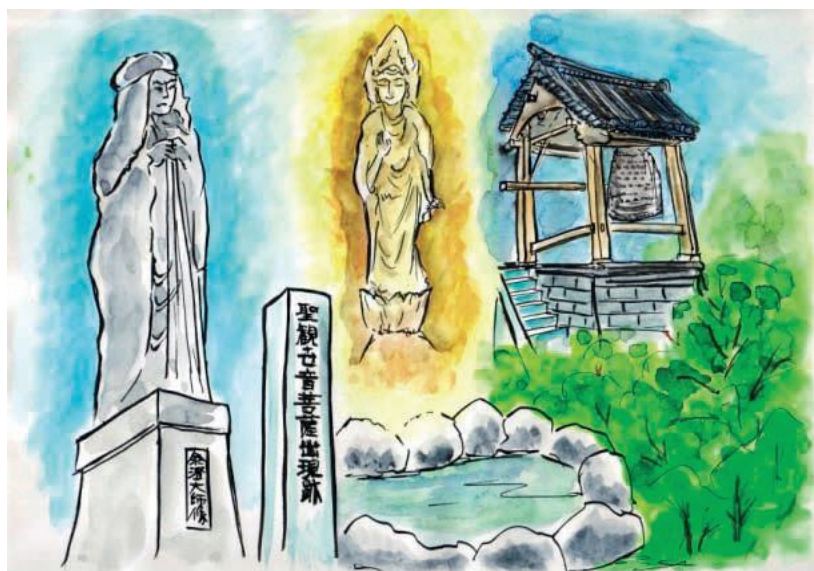
この立派なお寺と交流できるのは、先人達と
泰澄大師がとりもつご縁と感謝しながらお参り
している有志の姿が尊く感じられます。

それから村の人達は、この仏像を「福岡の観音さま」と呼ぶようになりました。

そして、観音さまが発掘された四月十八日かいちようはちじふひつをご開扉法要の日としてお参りをする事にいたしました。

その時には、福岡村をはじめ近くの村々からも多くの人たちがお参りに来て、たいへん賑にぎわっていました。





聖観世音菩薩像が安置されている観音堂付近には、「菩薩像」おんみあら「出現跡」「菩薩像御身洗とらいひい処」とらいひ「泰澄大師立像」りゅうじゅう「由来碑」ゆらいひ「鐘楼」しやうろう等の史跡や奉納の品々が数多くあり、町民の菩薩像に対する信仰の深さを読み取ることが出来ます。

また、聖観世音菩薩像は能美市指定文化財になっており、先人達から受け継いだ「福岡の観音さま」を大切に保管管理し、後の世に伝えて行く使命を自覚しましょう。

絵・後 泰夫